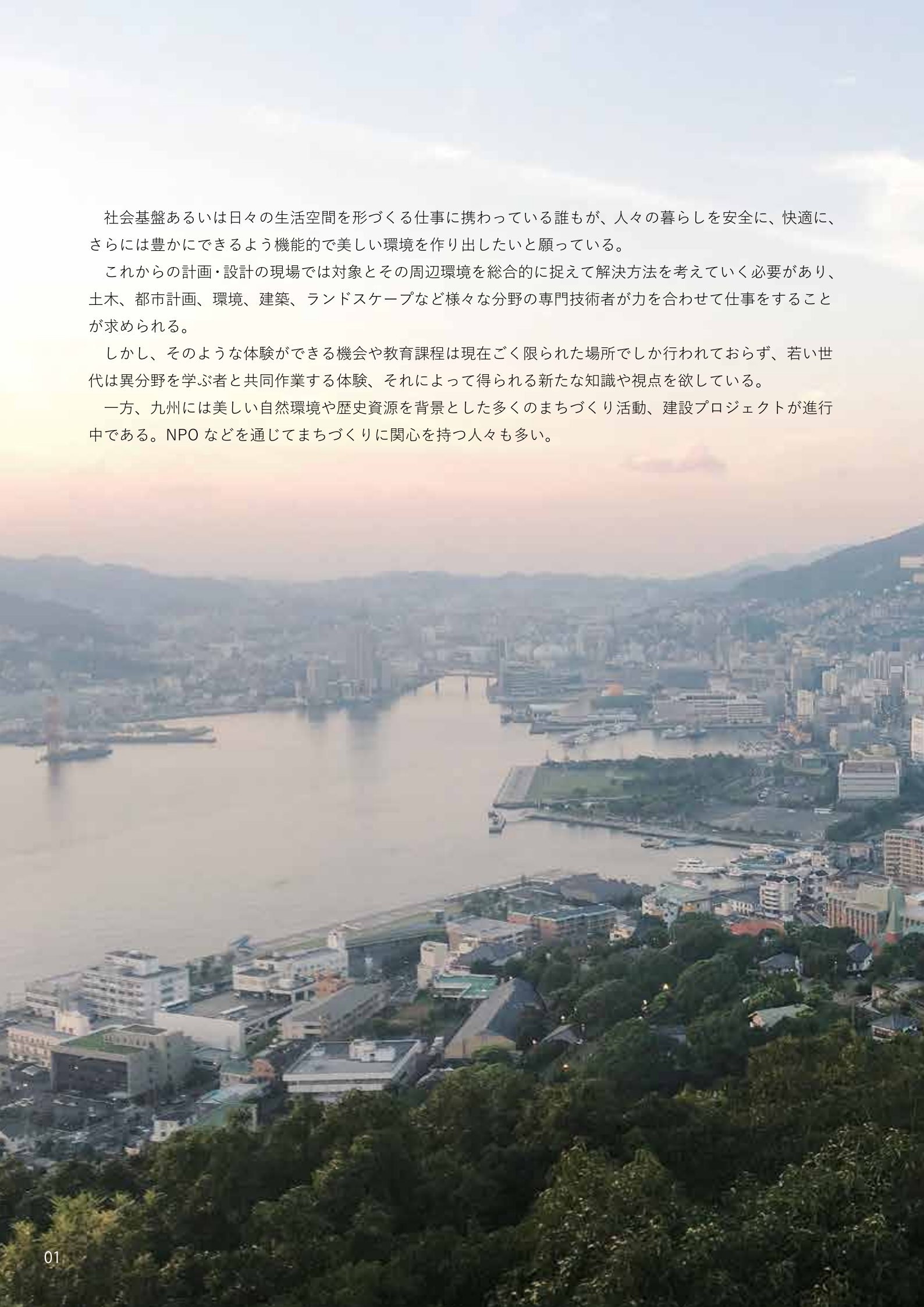
KYUSHU DESIGN CHARRETTE 2019 REPORT

社会基盤あるいは日々の生活空間を形づくる仕事に携わっている誰もが、人々の暮らしを安全に、快適に、さらには豊かにできるよう機能的で美しい環境を作り出したいと願っている。

これからの計画・設計の現場では対象とその周辺環境を総合的に捉えて解決方法を考えていく必要があり、土木、都市計画、環境、建築、ランドスケープなど様々な分野の専門技術者が力を合わせて仕事をすることが求められる。

しかし、そのような体験ができる機会や教育課程は現在ごく限られた場所でしか行われておらず、若い世代は異分野を学ぶ者と共同作業する体験、それによって得られる新たな知識や視点を欲している。

一方、九州には美しい自然環境や歴史資源を背景とした多くのまちづくり活動、建設プロジェクトが進行中である。NPO などを通じてまちづくりに関心を持つ人々も多い。



九州デザインシャレットとは

九州デザインシャレットは以上の背景を踏まえて、将来まちづくりや建設分野に携わる様々な専門分野の学生・若手技術者を対象に、実際のまちづくりの課題に集中して取り組む機会を提供し、専門家の指導の下で、異分野との共同作業を体験させ、現代の要請に適った人材を育成することを目的とする。

加えて、この体験を通じてその後も切磋琢磨しあえる仲間と出会い、その人的ネットワークが九州、全国に広がっていくことも、これからの九州、日本の美しい風景を守り、新たな文化価値を生むための大きな力となるはずである。

また、地元で進められているまちづくりの取り組みに対しての話題提供となることも期待できる。

＊シャレットとは：シャレット（charrette）は仏語で「荷馬車」という意味です。仏の大学生が設計課題の提出日に荷馬車に図面を積んで学校に来る様子から、短期間に集中的に行う演習を意味するようになったと言われています。

テーマ　まちへ深く誘う公共空間をデザインする

近年、にぎわいづくりや居場所づくり、健康増進、地域防災力の向上等、様々な観点から、これまでの概念や制度の枠を超えて、道路、河川、公園、広場等の公共空間を積極的に利活用し、心地よい時間と多様な交流を生み出すことで、都市や地域の価値を高める取り組みが増えている。公共空間の計画、設計、施工、運用に携わる専門技術者には、こうした新しい時代の価値観に対応した能力が求められている。

本演習では「まちへ深く誘う」をテーマとして、長崎市において実際に検討されている公共空間整備を題材として、デザイン提案を試みる機会を設けた。

演習課題　外国人居留地・唐人屋敷跡の「土神堂前広場」

今年の対象地である「唐人屋敷」は、17 世紀に江戸幕府によって建設された外国人居留地である。同じく江戸時代に建設された外国人居留地の出島に比べて、知名度は高くないが、土神堂、観音堂、天后堂、福建会館、それらをつなぐ路地に往時の面影が感じられる。また、斜面市街地特有の課題も抱えている。長崎市は、地区の中央を走る都市計画道路の整備とあわせて、地区の歴史文化を顕在化させる「唐人屋敷顕在化事業」を平成 13 年から進めており、地域住民との連携により「誘導門」「大門」「天后堂前広場」「蔵の資料館」等が整備されてきた。さらに、土神堂前広場や夜間景観向上にかかわる整備が予定されている。

本設計演習では、こうした背景をうけて多くの観光客が訪れる新地中華街から唐人屋敷跡に人の流れを誘うための「土神堂前広場」のあり方を検討し、模型等を制作して具体的なデザイン計画を提案することを課題とした。

指導講師

ゲスト講師

面出　薫
照明探偵団団長
照明デザイナー

吉村純一
プレイスメディア
多摩美術大学教授

田中智之
熊本大学教授
建築家

山下裕子
ひと・ネットワーク
クリエイター
広場ニスト

女鹿裕介
プレイスメディア

風景デザイン研究会（風研講師）

柴田　久
福岡大学 教授

田中尚人
熊本大学 准教授

星野裕司
熊本大学 准教授

高尾忠志
九州大学 准教授
長崎市景観専門監

石橋知也
長崎大学 准教授

増山晃太
風景工房
熊本大学 研究員

池田隆太郎
福岡大学 助手

プロセス

8/27 -Day.1-

13:30 ～
ガイダンス
・現地調査

16:30 ～
レクチャー①

山下裕子氏
「混沌の価値－
まちなか広場編－」

17:30 ～
レクチャー②

面出薫氏
「照明の重要性」

18:30 ～
現地調査

「照明探偵団
@唐人屋敷」

21:00 ～
懇親会

8/28 -Day.2-

9:00 ～
レクチャー③

星野裕司氏
「ヘソのつかみ方」

10:00 ～
コンセプト
メイキング

13:00 ～
講師による
エスキス①

14:30 ～
レクチャー④

柴田久氏
「広場のデザイン
方法例」

15:30 ～
デザイン
スタディ①

対象計画図検討

18:30 ～ 21:00
講師による
エスキス②

8/29　-Day.3-

9:00 ～
レクチャー⑤

吉村純一氏
「繋ぐ～歴史、
風景、まち、緑～」

10:00 ～
デザイン
スタディ②

計画図
・提案模型検討

13:00 ～
レクチャー⑥

田中智之氏
「伝える・描く
・表現する」

14:00 ～
デザイン
スタディ③

提案模型検討

17:30 ～
講師による
エスキス③

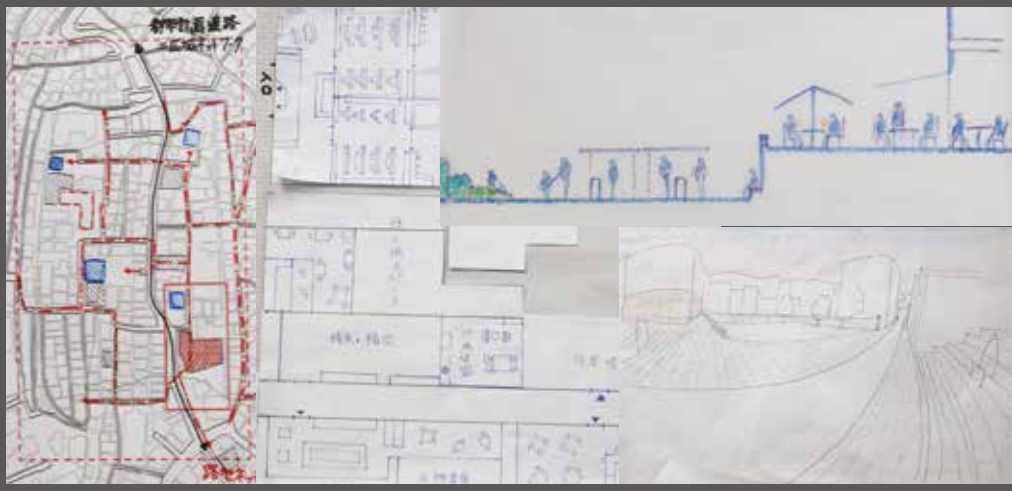
～ 21:00
デザインスタディ④
提案模型検討

8/30　-Day.4-

9:00 ～
提案模型・
プレゼン準備

13:00 ～
講師および
地域の関係者
による講評会

最終講評会



評価の視点

◇都市における広場のあり方・・・長崎のまちにおける対象広場の役割がよく考察されていて、それに対応した空間デザインや運営イメージが提案されているか

◇ デザインの地域性、魅力　・・・長崎のまちにふさわしい魅力的なデザインが提案されているか

◇ 提案の新規性、独創性　　・・・公共空間の現状を打破するような新しい、チャレンジングな提案がされているか

◇ プレゼンテーションの質　・・・時間内に、わかりやすく、自分たちの提案を伝えることができたか
計画図や模型がわかりやすくつくられているか

A 班「絽路」

風研講師賞

五三裕太　堀越義人　谷本大樹　福嶋佑太　濱田美知瑠　村田美弥

読み解き

・長崎の急峻な地形に対し、唐人屋敷の骨格は格子状に与えられた。
・急坂、狭い路地、不自然な段差。それらの細かな空間を、住民は自分のものとして使いこなしてきた。
・人々の様々な生活が積層する、高密で、小さなスケールの、ディープな空間。

方針

路地の延長に加え、中心の大きな既存樹、既存建築物の柱や屋根、現況地形を保存し既存の空間的特徴を継承した、住民にとって親しみやすい心地よい奥の空間へ。
一方、都市計画道路の整備に合わせたアンジュレーションのデザインにより、人々を奥へ自然と深く誘う空間へ。

デザイン

・路地を延長し引込んだ内側には曲線を用いず、地域に見られた植木、レンガ等の細かなディテールに取り入れる。
・既存樹の周りには座ることもできる回遊デッキを取り、既存の柱は住民がテントを張るなど、住民自身が自由に使い込める素地とする。
・路地の外側は、ベンチと植樹により奥に引き込まれる導線をデザインした。
・路地空間の広がりや、空家改修等への援用により、持続可能な地域性の継承を期待する。

B 班「広場を心臓に 人の流れを 」

石見佳苗　萩尾陸　新開夏織　八木優弥　児玉創　安達幸輝

読み解き

・江戸時代の唐人屋敷は唐人たちの物流拠点として機能し、現在の新地中華街に存在した蔵との間で物資や人々の往来が活発に行われていたことが考えられる。

・現地調査では、唐人屋敷跡の住民が地区内の多数の箇所から出入りすることが観察され、唐人屋敷に来ることの少ない観光客との行動範囲に差異がみられた。

方針

上述した往来の活発化を目的に、対象地を住民や観光客の活動拠点として位置付け、①昔の広場の機能を踏襲し人々の活動が活発に行われる、②住民が日常空間として利用できる、③観光客が唐人文化を知る拠点とする。

デザイン

・土神堂前広場の歴史を説明するサインにより観光客に唐人文化を伝えるための場、住民によるイベントや子供たちの遊び等の活動が行われる場、水際に人々が心地よく滞在できる佇みの場として、道路から奥にかけて段階的にゾーン分けした。

・さらにルーバーの設置や一段下げた地盤等により、広場の奥に佇む利用者と広場外に「見る・見られる」の関係が生まれ、それぞれの空間に見合った利用を促すような設計を心がけた。

C 班「まちの“踊り場”或いは“踊る場”」

長崎市役所賞

川藤知恵　TANG WEN SHI　矢野寛也　渡邉拓巳　重吉将伍　吉海雄大

読み解き

・広場の使い手は誰か？という論点の基、本エリアは歴史が色濃く残り、今も住民の生活と密接な関係にあると位置づけ、日常利用の熟考が「住民が使いこなす」ために必要だと考えた。

・広場＝“踊り場”と置き換え、生活・アクティビティ・歴史・交通の結節点を目指した。

方針

日常における広場のアクティビティを対象敷地に閉じないことが重要だと考え、隣接する通りを含めた計画とした。敷地を広く考えることで顕在化された 5 つの点を“キワ”と呼び、デザインの手がかりとしている。キワを再編することで広場の中心を通りと関係づけ、広場を“踊る場”として通りと合わせた使われ方を検討。

デザイン

・長崎特有の地形に対して生まれたキワは緑との関係が豊かであった。前述する緑との関係を踏襲し、5 つのキワを緑とセットで計画した。

・加えて各キワは異なる性格となるように計画、緑 - 連壁、緑 - レンガなど緑とハードを併せて考えることで広場に多様な居場所をつくる。

・各キワから広場方向を望む際、緑 - ハード - アクティビティのまとまりを本エリアの風景と重ねた。

D 班「広場を照らす『陽』、広場に灯る『灯』」 ゲスト講師賞

柿添公哉　高見昂佑　宮園侑門　山邊矢嗣　渡邊奈々恵　梶川遥奈

読み解き

・中国と日本の文化が溶けあった歴史、文化を感じさせる空間であり、取り壊される予定の市場はかつて非常に賑わっており生活の中心であった。
・またランタンフェスティバルではお堂巡りが行われており、新地中華街と合わせてメイン会場の１つとなっている。
・一方、住民はお堂の存在や歴史をもっと知って欲しいと考えている。

方針

派手な新地中華街と対比させた落ち着いた雰囲気を感じさせるデザインへ。人の営みが主役となるように、広場を再び生活の中心として復活させる。昼には人の営みによる「陽」、夜は建物からこぼれる明りの「灯」へ。

デザイン

・魚市場のある建物を飲食店等として再活用し、窓と出入り口の設置により人の営みと屋内の明りが広場から見えるようにする。
・広場北側には土神堂周辺と同じレンガ調の塀を設け、大門から入った時に土神堂の一部が見える様に高さと位置を調整。
・これにより広場と土神堂の一体感を創出する。広場には夏と冬の影を考慮して人が座って休める段差を設置、さらに水路側には柳を植え、水の音を感じるサウンドスケープを作る。

E 班「はみ出す市　（段差を生かして多様なアクティビティを受け止める）」

伊島実咲　常泉佑太　松榮友里　山口昌紘　金野拓朗

読み解き

1) 活気は異なるものの今も昔も市場である。地元住民から、新しく広場ができることに無関心である意見が把握された一方、市場が賑わっていた昔は良かったと懐かしんでいる声も挙げられた。
2) 唐人屋敷の歴史を感じさせる空堀が4つの堂、唐人屋敷全体を囲んでる。
3) 観光客よりも、通勤・通学などの生活動線として通過。

方針

飲食がきっかけとなり人を集め、小規模の居場所をたくさん作ることで人が溜まることを目指す。また市場だけの空間から、小規模空間ができ、日常の様々なアクティビティが、広場へとにじみ出すことも想定する。

デザイン

・市が広場へとどんどんはみ出していくイメージ。
・道路に近い場所は滞在時間の短い、ひと休みや買い物メインの広場。奥に行くにつれて滞在時間の長いディープな場となり、どんどん奥へと誘う。行き着く先に空堀の発見。
・露天商やバザールなど、市がはみ出していくことによって、日々のアクティビティはどんどん増える。
・人が集まりだすと活気が生まれ、そこにまた新しい商が生まれるといった波及効果へ。

受講生の声

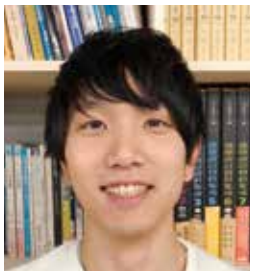
A班

五三裕太
（東京大学大学院社会基盤学専攻景観研究室）

非常にコンパクトな期間で集中的に取り組むことは、学生という時間に恵まれた身分が故にこそ重要な意味を持つと思った。土木を専攻する以上、最終的には空間として解を示す必要がある中で、今回のような短期間での議論から空間を模索する経験は、今後どのような立場で土木に関わることとなっても決して忘れてはならないものだと思いました。

堀越義人
（法政大学大学院都市環境デザイン工学専攻景観研究室）

設計においてどのように取り組んでいけば良いのかという点をレクチャーによって学べた。レクチャーもしっかり段階分けがされていたことで自分たちの悩みの解決に役立てることができた。
このシャレットの雰囲気を後輩にも伝えたいです！！！今回出会えたメンバーとは今後もずっと切磋琢磨できるような関係を築いていきたいです！！



谷本大樹
（熊本大学大学院地域風土計画研究室）

色々な分野や大学から同世代の人が集まって一つの課題に取り組むということがとても楽しかったです。すごくいい刺激になりました。また、先生方の講義やアドバイスがとても面白く、普段は経験できないことでした。
沢山の方々のおかげでとても楽しく学ぶことができました。これから頑張ろうという刺激をもらうことが一番の収穫だったと思います。

福嶋佑太
（東京理科大学大学院建築学専攻伊藤香織 都市計画・都市デザイン研究室）

分野の異なる様々な学生や社会人との交流を通して、自分が持ちえていなかった知識を身につけることができた。また、豪華な教授陣やチューターの方々のエスキスがこまめにあることで、自分たちの班が今何を考えるべきで、何をするべきかと言う指針を得ることができた。そのおかげで無事提出することもでき、かつ素晴らしい提案ができたと思う。

濱田美知瑠
（関西大学大学院システム理工学部景観研究室）

短い時間での作業は非常に大変でしたが、切羽詰まった状態であるからこそ、自ら発言したり、行動に移す動力になったかと思います。
模型作りはほぼ初めての状態でした。何もわからない状態での参加でしたが、講師陣やサポーターさん、チームメイトの皆さんがサポートしてくださり、初めてながらも沢山の学習する機会と挑戦を経験することができました。

村田美弥
（国際航業株式会社インフラマネジメント事業部）

良し・悪しを判断するだけでなく、そこから代替案を提案できなかったことが、今回の反省であり、一番悔しかった部分です。
今回のワーキングの中で、自分の得意・不得意を知れたこと、不得意との向き合い方を学んだことは、大きな収穫だったと感じています。

B 班

石見佳苗
（熊本大学大学院土木建築学専攻景観デザイン研究室）

短期間で広場のコンセプトメイキングからデザイン設計まで一連の流れを学べたことがよかったです。
チームで WS を行うための導入として、参加者の専門性問わず誰でも広場のデザインを考えることができるような解かりやすい内容で、非常に参考になりました。

萩尾　陸
（西日本工業大学デザイン学部建築学科意匠系石垣研究室）

普段建築の意匠系を学んでいるものとして、景観や都市計画の面から１つの課題に取り組むということが少なかったので、新しい視点からものを考えるということが大切だなという事を学ぶことが出来て良かったです。
今回の経験を生かしてこれからの全ての課題に生かしていきたいです。

新開夏織
（関西大学大学院環境都市工学専攻建築学分野住環境デザイン研究室）

レクチャーでは、公共空間、照明デザイン、土木、建築、ランドスケープ等、様々な分野で活躍されている専門家のお話をお聞きすることができ、広場を考える上でこんなにたくさんの視点やアプローチがあるのだと学ぶことができました。
また、グループ内にも土木と建築の学生が混在しており、土木的考え方と建築的考え方の違いに触れることができたのもよかったです。

八木優弥
（愛媛大学大学院都市・地域デザイン研究室）

今回自分の力量を測れる機会として参加した。できていたところとして、対象地形の関わりをひいて見ることができたこと、使う人を具体的に明確にできた。一方できなかった箇所は設計のイメージを模型に落とし込めなかったこと、うまく見せることができなかった。今回のシャレット参加は仲間が増えたりしていい経験になりました。来年はスタッフとして参加したいと考えています。

児玉　創
（東京大学大学院社会基盤学専攻景観研究室）

講師の方々によるレクチャーは、シャレットでの作業だけでなく今後にも活かせるようなもので多くのことを学ぶことができたことが良かった。
設計演習をシャレットで初めて経験し、構想・計画・図面や模型の作成といった一連の流れを学ぶことができた。そして、コンセプトをしっかり練り上げてもそれを空間に表現していくことの難しさを実感した。

安達幸輝
（大日本コンサルタント株式会社中部支社技術部地域環境計画室）

グループワークは、分野も年齢も住んでる地域も違う初対面の六人が集まるためとても刺激的で、他の受講生の頑張る姿を見て自分はまだまだ頑張りが足りないなと励みになりました。もちろんグループ内だけでなく、他のグループの受講生や、OBOG の方々、講師の先生方と知り合えたことも大きな財産となりました。

C 班

川藤知恵
（九州大学景観研究室）

デザインシャレットでは、普段関わることのない他大学の学生や社会人の方と、出会ってわずか四日間で１つのものを完成させるという経験ができ、その難しさや面白さを学ぶことができました。シャレットの経験を活かして、今後ももっと大学の枠を超えたイベントに参加してみたいと思いました。また、様々な人との出会いとコミュニケーションをしていこうと思いました。

TANG WEN SHI
（長崎大学ランドスケープ・アーキテクチュア・デザイン研究室）

設計の進み方にあたって、ちょうどそれに対する授業があったこと、また、歓迎会や設計の段階で色々な先生方から意見やアドバイスをもらえたことがよかったと思います。全部の筋道が分かったとは言い切れませんが、コツや考え方は少し得たと思います。設計は各グループの独特なデザインがあり、勉強になりました。

矢野寛也
（徳島大学理工学部社会基盤デザインコース）

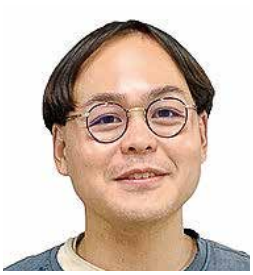
技術的なことも当然学べたが、何より短期間でチームを作り上げて一つの目標に取り組むことは大変勉強になった。今後も勉強していく中で、このような催し物にも積極的に参加していきたいと思いました。4 日間お世話になった講師の方々やスタッフの方々、このような機会を設けてくださりありがとうございました。

渡邉拓巳
（早稲田大学大学院建設工学専攻景観・デザイン研究室）

良かった点：レクチャーの内容と分量、初日のフィールドワーク、エスキスの回数
4 日間ありがとうございました。

重吉将伍
（福岡大学大学院景観まちづくり研究室）

他大学の学生や社会人の方と交流するきっかけであり、異なる分野の方と話すことができ学ぶことが多くありました。また 4 日間という短期間で自分たちの提案をまとめることや表現の難しさを痛感し、自分が「できたこと」「できなかったこと」が明確になりました。来年はスタッフとして参加したいと思っています。



吉海雄大
（熊本大学くまもと水環境・減災研究教育センター特別研究員）

多分野間での課題への取り組む姿勢、デザインの芽を育てる意識を如何に共同体のなかで共有していくか。というのが今回のシャレット中の大きい課題となりました。講師陣からいただいた講評に対してチームが面白いと思うこと、個人が可能性を孕んでいると思うことの意識をつなぐ難しさを痛感した 4 日間だったと思います。

D 班

柿添公哉
（福岡大学大学院景観まちづくり研究室）

班内だけでなく、他の班のアイディアや作業の進め方に自分では考えつかなかったものがあり、様々な視点で考えることができた。また実際に現地に赴くことでわかる現地の特徴や課題を理解し、広場にどのように反映させるかを考えることはとても良い経験になった。短い時間の中であったため、班員の作業を分担し、効率よく進めることが大事であることを学んだ。

高見昂佑
（徳島大学理工学科社会基盤デザインコース）

広場を作っていくのに必要なことを、解説があったすぐあとに、実践を通じて体に叩き込めたのがよかった。また先生方のコメントがかなり専門的で、様々な視点（利用者の視点など）から議論がなされており、自分とは違う班の内容でも大変聞いていて興味を持てるものでした。他にも普通に生活していれば交わることのできない他大学の学生の方と交流することができたのもいい刺激でした。

宮園侑門
（東京大学工学部都市工学科都市計画コース）

決められた締切（夜なべをしない）のなかで議論と決断をどう下すかについてとても勉強になった。講師陣が豪華で本当にレクチャーが全て面白く、勉強になった。ゲスト講師の方々が土木専門ではないことが、講評会をフェアなものにしていたと思う。シャレット終了後に長崎歴史博物館へ訪れた際に、唐人屋敷を含む長崎の大きな歴史を捉えた提案が少なかったことに気付かされた。

山邊矢嗣
（長崎大学工学部社会環境デザイン工学コース環境計画研究室）

他大学の教師陣から直接講義を受けるという非常に貴重な経験ができた。建築分野の方もいらっしゃり、知識の幅を広げる事ができた。なにより同世代の学生や社会人の方々がどのような知識や技術を持っているのか、どんな研究をしているのか、どんな考え方をしているのかを知る事が出来たのが一番の収穫だった。

渡邊奈々恵
（京都大学大学院社会基盤工学専攻景観設計学分野川﨑研究室）

年齢や専門分野も違うメンバーと同じ立ち位置で議論を行えたことが、貴重な良い経験となったと感じます。
グループワークの進め方から様々な視点まで勉強になりました。
楽しかったです！ありがとうございました。

梶川遥奈
（中央復建コンサルタンツ株式会社道路系部門）

照明デザインの講義を受け、実際に夜の街に出て、街にある照明の良し悪しについて議論ができたことはとても勉強になりました。
また、グループワークでは実際に手を動かして、デザイン案として考えたことを他の班員に納得してもらえるように伝える難しさ、ゆるぎない強いこだわりと柔軟さのバランスのとり方などを失敗しながらも学ぶことができました。

E 班

伊島実咲
（九州大学工学部地球環境工学科）

計画や模型製作の段階で講師の方々から何度もフィードバックをいただけたことで、より良いデザインが追求できたのは良かった。
学部 2 年のこの時期にこのようなレベルの高い演習に参加させていただいたことは今後の自分の進路決定や勉強の仕方、風景デザインとの向き合い方など様々なことにおいて大きな意味を持つと思います。

常泉佑太
（東京理科大学大学院建築学専攻伊藤香織 都市計画・都市デザイン研究室）

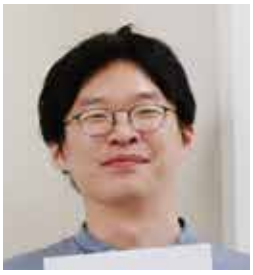
グループワークで、普段接することがないような他分野の学生や社会人の方と一緒に議論・制作ができたことで、視野が広がりました。
また、景観デザイン、建築、ランドスケープ、照明など様々な分野の先生方から一度にご講評いただける機会はなかなかないので非常に勉強になりました。

松榮友里
（高知工科大学大学院社会システム工学コース景観デザイン研究室）

私は歴史を読み解くということに苦手意識を持っていたのですが、今回参加することで、まちあるきをしながら、歴史の破片のようなものを見つけて、資料などと照らし合わせながら読み解いたり、地元の人たちとの会話の中から小さい声を引き出したりと、とても勉強になりました。

山口昌紘
（扇精光コンサルタンツ株式会社）

まちづくりには「夢」や「チャレンジ」も大切だということ。私が所属したグループは残念ながら賞をいただくことができませんでした。チームで力を合わせて最大限の成果を出したと思っているので悔いはないのですが、足りなかったのはきっと周りをわくわくさせる「夢」のようなものなのではないかと思っています。



金野拓朗
（株式会社オリエンタルコンサルタンツ関東支店都市政策・デザイン部）

30 代の社会人として参加するか迷いましたが、日常的な業務の中でここまで濃密にデザインの議論をすることは無いので、学生時代の初心に戻れた感じがして、やっぱり参加して良かったなぁと思っています。
学んだことは仕事に具体的にフィードバックしたいですし、僕のチームの部下や後輩にも、来年社会人として参加することを勧めようと考えています。

学会発表

九州デザインシャレット 2019 in 長崎市の実施後には、12 月 6 ～ 8 日に日本大学で開催された第 15 回土木学会景観・デザイン研究発表会にてポスター発表を行い、優秀賞を受賞しました。

九州デザインシャレット 2019 in 長崎市

○高尾忠志、池田隆太郎、柴田久
田中尚人、星野裕司、石橋知也、増山晃太
風景デザイン研究会 info@fukei-design.jp

将来まちづくりや建設分野に携わる様々な分野の学生・若手技術者を対象に、実際のまちづくりの課題に取り組む機会を提供し、専門家指導の下、**異分野との共同作業を体験させ、現代の要請に適った人材を育成する**。この体験を通じてその後も切磋琢磨しあえる仲間と出会い、その**人的ネットワークが九州、全国に広がっていくこと**もこれからの九州、日本の美しい風景を守り、新たな文化価値を生むための大きな力となるはずである。

【特徴①】地域に密着した課題設定

《まちへ深く誘う公共空間をデザインする》

近年、にぎわいづくりや居場所づくり、健康増進、地域防災力の向上等、様々な観点から、これまでの概念や制度の枠を超えて、道路、河川、公園、広場等の公共空間を積極的に利活用し、心地よい時間と多様な交流を生み出すことで、都市や地域の価値を高める取り組みが増えている。長崎市は地域住民との連携により、長崎市最初の外国人居留地「唐人屋敷」地区の歴史文化を顕在化させる事業を進めており、その一環として土神堂前広場や夜間景観向上にかかわる整備が予定されている。本設計演習では、こうした背景を受けて、多くの観光客が訪れる新地中華街から唐人屋敷跡に人の流れを誘うための**「土神堂前広場」のあり方を検討し、模型等を製作して具体的なデザイン計画を提案することを課題とした。**

【特徴②】実践的で多彩な講師陣

上段：ゲスト講師
下段：風景デザイン研究会（風研講師）

面出 薫（照明探偵団団長 照明デザイナー）
吉村純一（プレイスメディア 多摩美術大学教授）
田中智之（熊本大学 教授 建築家）
山下裕子（ひと・ネットワークseverクリエイター 広場ニスト）
女鹿裕介（プレイスメディア）

柴田 久（福岡大学 教授）
田中尚人（熊本大学 准教授）
星野裕司（熊本大学 准教授）
高尾忠志（九州大学 准教授 長崎市景観専門監）
石橋知也（長崎大学 准教授）
増山晃太（風景工房 熊本大学 研究員）
池田隆太郎（福岡大学 助手）

【特徴③】短期集中 / グループワーク / 合宿形式のプログラム

コンセプト～プランニング～デザイン～プレゼンの基礎を体系的に習得

最終講評会

地域に対して新しい知見を与えた

◇評価の視点

__都市における広場のあり方__
長崎のまちにおける対象広場の役割がよく考察されていて、それに対応した空間デザインや運営イメージが提案されているか

__プレゼンテーションの質__
時間内に分かりやすく、自分たちの提案を伝えることができたか。計画図や模型がわかりやすくつくられているか

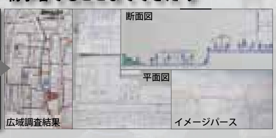
__提案の新規性、独創性__
公共空間の現状を打破するような新しい、チャレンジングな提案がされているか

__デザインの地域性、魅力__
長崎のまちにふさわしい魅力的なデザインが提案されているか

◇各班成果 凡例

初学者でもここまでできた

コンセプト
読み解き
方針
デザイン
模型写真
その他成果物 一例
班員 氏名、所属

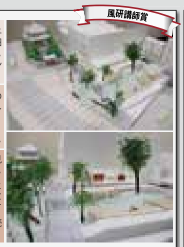


A 班『紹路』（風研講師賞）

長崎の急峻な地形に対し、唐人屋敷の骨格は格子状に与えられた。急坂、狭い路地、不自然な段差。それらの細かな空間を、住民は自分のものとして使いこなしてきた。人々の様々な生活が積層する、高密で、小さなスケールの、ディープな空間。

路地の延長に加え、中心の大きな既存樹、既存建築物の柱や屋根、現況地形を保存し既存の空間的特徴を継承した、住民にとって親しみやすい心地よい奥の空間へ。
一方、都市計画道路の整備に合わせたアンジュレーションのデザインにより、人々を奥へ自然と深く誘う空間へ。

路地を延長し引込んだ内側には曲線を用いず、地域に見られた植木、レンガ等の細かなディテールに取り入れる。既存樹の周りには座ることもできる回遊デッキを取り、既存の柱は住民がテントを張るなど、住民自身が自由に使い込める素地とする。路地の外側は、ベンチと植樹により奥に引き込まれる導線をデザインした。
路地空間の広がりや、空家改修等への援用により、持続可能な地域性の継承を期待する。



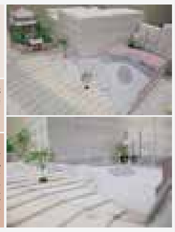
■五三裕太（東京大学大学院社会基盤工学専攻景観研究室） ■堀越義人（法政大学大学院都市環境デザイン工学専攻景観研究室）
■谷本大樹（熊本大学大学院地域風土計画研究室） ■福島佑太（東京理科大学大学院建築学専攻伊藤香織 都市計画・都市デザイン研究室）
■濱田美知瑠（関西大学大学院システム理工学部景観研究室） ■村田美弥（国際工業株式会社インフラマネジメント事業部）

B 班『広場を心臓に 人の流れを』

江戸時代の唐人屋敷は唐人たちの物流拠点として機能し、現在の新地中華街に存在した蔵との間で物資や人々の往来が活発に行われていたことが考えられる。現地調査では、唐人屋敷跡の住民が地区内の多数の箇所から出入りすることが観察され、唐人屋敷に来ることの少ない観光客との行動範囲に差異がみられた。

上述した往来の活発化を目的に、対象地を住民や観光客の活動拠点として位置付け、①昔の広場の機能を踏襲し人々の活動が活発に行われる、②住民が日常空間として利用できる、③観光客が唐人文化を知る拠点とする。

土神堂前広場の歴史を説明するサインにより観光客に唐人文化を伝えるための場、住民によるイベントや子供たちの遊び等の活動が行われる場、水際に人々が心地よく滞在できる佇みの場として、道路から奥にかけて段階的にゾーン分けした。さらにルーバーの設置や一段下げた地盤等により、広場の奥に佇む利用者と広場外に「見る・見られる」の関係が生まれ、それぞれの空間に見合った利用を促すような設計を心がけた。



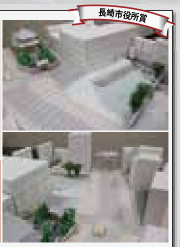
■石見佳苗（熊本大学大学院土木建築学専攻景観デザイン研究室） ■萩尾陸（西日本工業大学デザイン学部建築学科意匠系石垣研究室）
■新開夏織（関西大学大学院環境都市工学専攻住環境デザイン研究室） ■八木優弥（愛媛大学大学院都市地域デザイン研究室）
■児玉創（東京大学大学院社会基盤工学専攻景観研究室） ■安達幸輝（大日本コンサルタント株式会社中部支社技術部地域環境計画室）

C 班『まちの“踊り場”或いは“踊る場”』（長崎市役所賞）

広場の使い手は誰か？という論点の基、本エリアは歴史が色濃く残り、今も住民の生活と密接な関係にあると位置づけ、日常利用の熟考が「住民が使いこなす」ために必要だと考えた。広場＝“踊り場”と置き換え、生活・アクティビティ・歴史・交通の結節点を目指した。

日常における広場のアクティビティを対象敷地に閉じないことが重要だと考え，隣接する通りを含めた計画とした。敷地を広く考えることで顕在化された 5 つの点を “キワ” と呼び，デザインの手がかりとしている。キワを再編することで広場の中心を通りと関係づけ，広場を “踊る場” として通りと合わせた使われ方を検討。

長崎特有の地形に対して生まれたキワは緑との関係が豊かであった。前述する緑との関係を踏襲し、5 つのキワを緑とセットで計画した。加えて各キワは異なる性格となるように計画、緑 - 連壁、緑 - レンガなど緑とハードを併せて考えることで広場に多様な居場所をつくる。各キワから広場方向を望む際、緑 - ハード - アクティビティのまとまりを本エリアの風景と重ねた。



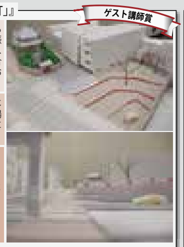
■川藤知恵（九州大学景観研究室） ■TANG WEN SHI(長崎大学ランドスケープ・アーキテクチュア・デザイン研究室）
■矢野寛也（徳島大学理工学部社会基盤デザインコース） ■渡邉拓巳（早稲田大学大学院建設工学専攻景観・デザイン研究室）
■重吉将伍（福岡大学大学院景観まちづくり研究室） ■吉海雄大（熊本大学くまもと水環境・減災研究教育センター特別研究員）

D 班『広場を照らす「陽」、広場に灯る「灯」』（ゲスト講師賞）

中国と日本の文化が溶けあった歴史、文化を感じさせる空間であり、取り壊される予定の市場はかつて非常に賑わっており生活の中心であった。またランタンフェスティバルではお堂巡りが行われており、新地中華街と合わせてメイン会場の１つとなっている。一方、住民はお堂の存在や歴史をもっと知って欲しいと考えている。

派手な新地中華街と対比させた落ち着いた雰囲気を感じさせるデザインへ。人の営みが主役となるように、広場を再び生活の中心として復活させる。昼には人の営みによる「陽」、夜は建物からこぼれる明りの「灯」へ。

魚市場のある建物を飲食店等として再活用し、窓と出入り口の設置により人の営みと屋内の明りが広場から見えるようにする。広場北側には土神堂周辺と同じレンガ調の塀を設け、大門から入った時に土神堂の一部が見える様に高さと位置を調整。これにより広場と土神堂の一体感を創出する。広場には夏と冬の影を考慮して人が座って休める段差を設置、さらに水路側には柳を植え、水の音を感じるサウンドスケープを作る。



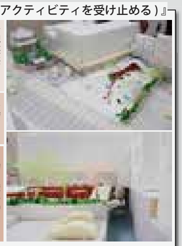
■柿添公哉（福岡大学大学院景観まちづくり研究室） ■高見昂佑（徳島大学理工学科社会基盤デザインコース）
■宮園侑門（東京大学都市工学科都市計画コース） ■山邊矢嗣（長崎大学社会環境デザイン工学コース環境計画研究室）
■渡邊奈々恵（京都大学大学院社会基盤工学専攻景観設計学分野川崎研究室） ■梶川遥奈（中央復建コンサルタンツ株式会社道路系部門）

E 班『はみ出す市 （段差を生かして多様なアクティビティを受け止める）』

1) 活気は異なるものの今も昔も市場である。地元住民から、新しく広場ができることに無関心である意見が把握された一方、市場が賑わっていた昔は良かったと懐かしんでいる声も挙げられた。2) 唐人屋敷の歴史を感じさせる空堀が 4 つの堂、唐人屋敷全体を囲んでる。3) 観光客よりも、通勤・通学などの生活動線として通過。

飲食がきっかけとなり人を集め、小規模の居場所をたくさん作ることで人が溜まることを目指す。また市場だけの空間から、小規模空間ができ、日常の様々なアクティビティが、広場へとにじみ出すことも想定する。

市が広場へとどんどんはみ出していくイメージ。
道路に近い場所は滞在時間の短い、ひと休みや買い物メインの広場。奥に行くにつれて滞在時間の長いディープな場となり、どんどん奥へと誘う。行き着く先に空堀の発見。露天商やバザールなど、市がはみ出していくことによって、日々のアクティビティはどんどん増える。人が集まりだすと活気が生まれ、そこにまた新しい商が生まれるといった波及効果へ。

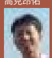


■伊島実咲（九州大学工学部地球環境工学科） ■常泉佑太（東京理科大学大学院建築学専攻伊藤香織 都市計画・都市デザイン研究室）
■松榮友里（高知工科大学大学院社会システム工学コース景観デザイン研究室） ■山口昌紘（扇精光コンサルタンツ株式会社）
■金野拓朗（株式会社オリエンタルコンサルタンツ関東支店都市政策・デザイン部）

受講生の声

計 29 名の受講生から大変貴重なコメントをいただきました！

徳島大学 高見昂佑



広場を作っていくのに必要なことを、解説があったすぐあとに、実践を通じて体に叩き込めたのがよかった。また先生方のコメントがかなり専門的で、様々な視点から議論がなされており、自分とは違う班の内容でも大変聞いていて興味を持てるものでした。他にも普通に生活していれば交わることのできない他大学の学生の方と交流することができたのもいい刺激でした。

九州大学 川藤知恵

デザインシャレットでは、普段関わることのない他大学の学生や社会人の方と、出会ってわずか四日間で 1 つのものを完成させるという経験ができ、その難しさや面白さを学ぶことができました。**シャレットの経験を活かして、今後ももっと大学の枠を超えたイベントに参加してみたいと思いました。**また、様々な人との出会いとコミュニケーションをしていこうと思いました。

熊本大学大学院 石見佳苗

短期間で広場のコンセプトメイキングからデザイン設計まで一連の流れを学べたことがよかったです。またチームで WS を行うための導入として、**参加者の専門性問わず誰でも広場のデザインを考えることができるような解かりやすい内容で、非常に参考になりました。**

関西大学大学院 濱田美知瑠

模型作りはほぼ初めてでしたが、**講師陣やサポーターさん、チームメイトの皆さんがサポートしてくださり、初めてながらもたくさんの学習する機会と挑戦を経験することができました。**また限られた時間での作業は、自ら発言し、行動に移す動力になったかと思います。

東京理科大学大学院 常泉佑太

グループワークで、**普段接することがないような他分野の学生や社会人の方と一緒に議論・制作ができたことで、視野が広がりました。**また、景観デザイン、建築、ランドスケープ、照明など様々な分野の先生方から一度にご講評いただける機会はなかなかないので非常に勉強になりました。

国際工業㈱ 村田美弥

良し・悪しを判断するだけでなく、そこから代替案を提案できなかったことが、今回の反省であり、一番悔しかった部分です。**今回のワーキングの中で、自分の得意・不得意を知れたこと、不得意との向き合い方を学んだことは、大きな収穫だったと感じています。**

大日本コンサルタント㈱ 安達幸輝

グループワークは、分野も年齢も住んでる地域も違う初対面の六人が集まるためとても刺激的で、他の受講生の頑張る姿を見て自分はまだまだ頑張りが足りないなと励みになりました。もちろん**グループ内だけでなく、他のグループの受講生や、OBOG の方々、講師の先生方と知り合えたことも大きな財産となりました。**

中央復建コンサルタンツ㈱ 梶川遥奈

照明デザインの講義後、実際に夜の街で照明の良し悪しについて議論ができたことはとても勉強になりました。またグループワークでは実際に手を動かして、デザイン案として**考えたことを班員に納得してもらえるように伝える難しさ、ゆるぎない強いこだわりと柔軟さのバランスのとり方などを失敗しながらも学ぶことができました。**

九州デザインシャレット2019報告書

・主催　風景デザイン研究会
・協力　長崎市
・発行　2020年2月
・表紙/裏表紙デザイン　池田隆太郎（福岡大学）

・問い合わせ先　高尾忠志（九州大学）
takaotadashi@icloud.com